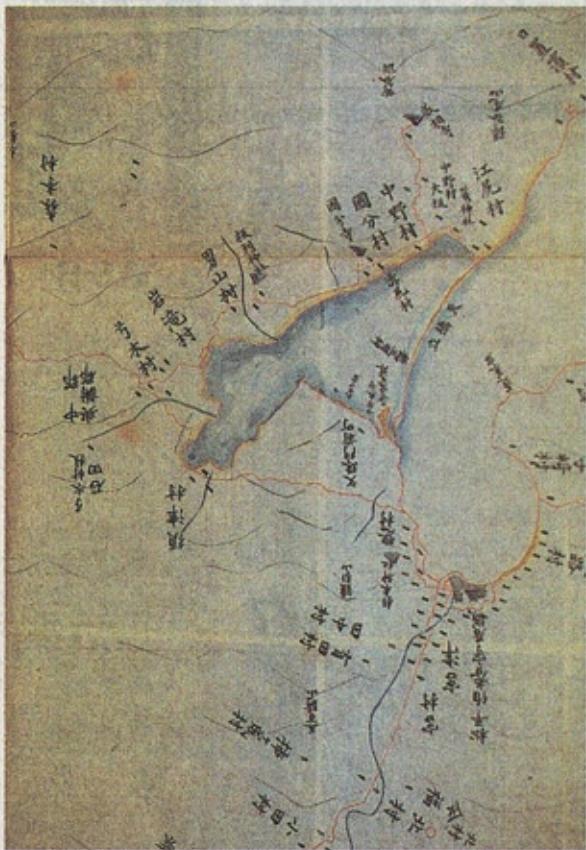


天橋立くつきり



伊能の大図

200年前の宮津描く

江戸時代後期の測量

家、伊能忠敬（一七四五—一八一八年）がつくりた「大図」と呼ばれる日本地図の写し二百六枚を本邦圖会図書館で発見した研究グループが二十二日までに、写しを撮影した写真のうち、これまで未公開だった二十二枚を開に応じた。二十二枚に

京都府の天橋立周辺の地図。右下は現在の宮津市付近。上が北（伊能忠敬研究会渡辺一郎氏提供）

収められた地域は現在の宮城、愛知、兵庫、京都、徳島など計十九府県にまたがっている。

写しは一枚が疊一枚分の大きさ。約二百年前の地名や城、集落が丁寧に書き込まれ、街道や海岸線など測量に用いた線が赤で描かれている。大図は日本列島を二百十四に分け縮尺三万六千分の二で描かれ、近代の全国地図の基になつたが、原図は火災などで焼失した。伊能忠敬研究会「できれば、各地で大図を原寸大で展示したい」と話している。

忠敬も見たかつた「炎の架け橋」

天と地の神が天橋立で結ばれたといふ恋の伝説「天の浮橋神話」をもとに、一九九四年に始まり、今年で八回目。天橋立の夏のオープニングイベントとして定着している。

抽選で選ばれた結婚前

市の天橋立を二百本のたいまつでライトアップする「天橋立 炎の架け橋」（宮津市など実行委主催）が二十日夜に行われ、集まった約二万人（主催者発表）の見物客を神秘的なムードで魅了した。

了した。

了した。